

「ストレス」と「癒し」の研究会～第7回講演会の内容～

日時:平成25年2月27日(水)18:00～19:30

場所:病院棟4F 臨床講堂2

演題: 『和温療法とは?』

演者: 鄭 忠和先生(和温療法研究所所長・獨協医科大学特任教授)

講演要旨:平成元年、長期入院中の難治性重症心不全の患者さんが「亡くなる前に1度温泉に入りたい」と看護師さんに話していることを聞き、その願いをかなえることはできないのかと思ったことが、和温療法に取り組むきっかけであった。自動昇降式浴槽に温泉を入れて、入浴中の心エコー図を記録して、心拍出量の増加を確認して、患者の願いを叶えることができた。自動昇降式浴槽を用いて毎日1回の入浴を継続すると、症状は1週ごとに改善し2ヶ月後には退院できたのである。その後、慢性心不全に対する入浴療法の研究に本格的に取り組んだ。温水浴では浴中に心内圧は上昇し、水圧のない乾式サウナ浴(60℃・15分間)を開発。出浴後30分間の安静保温、最後に発汗に見合う水分摂取という和温療法のマニュアルを確立した。

和温療法は{和む・温もり}療法で、安全で副作用は限りなく少ない。患者に優しい治療法である。難治性慢性心不全に和温療法を1日1回、2週～4週間施行すると、自覚症状の改善、心拡大の縮小、BNPの減少、自律神経機能の是正などがみられる。また下肢の疼痛や潰瘍がみられる閉塞性動脈硬化症にも効果がみられる。原因不明の難治性疼痛や難治性疲労症候群などの治療抵抗性の疾患に効果を発揮する。

和温療法の効果発現機序は多彩で、すべて解明されているわけではない。機序の一つは血管機能の改善である。心不全モデルや下肢虚血作成モデルを用いた実験で、和温療法はNOの発現を亢進することが証明されている。またHSP90, 27, 32が増加することも証明している。和温療法は心地良い発汗、ストレス軽減、鬱気分を改善する。

和温療法は種々の難治性疾患を全身的・全人的に回復させる治療法である。

鄭先生のプロフィール:1973年に鹿児島大学を卒業。心臓専門医を目指して、東京大学、米UCLAで学ぶ。1989年に、鹿児島大学付属病院霧島リハビリテーションセンターに勤務。上記講演要旨にあるように、重症の心不全の患者が、「死ぬ前に一度温泉に入りたい」と願っているのを見たのが、「温熱療法」を研究する契機となった。水圧と心臓への負荷などについて研究を重ね、ついに、慢性心不全・閉塞性動脈硬化症・慢性疲労症候群などの難治性疾患に「温熱療法」が効果をもたらすことを明らかにした。

これまでの「温熱療法」は、「がんに対する高熱での局所療法」として認知されていたが、鄭教授が取り組んだ「温熱療法」は、「和む温度での全身療法」で、内容は全く違う。そこで、「和む・温もり療法」すなわち「和温療法」と鄭教授は命名した。温室 60 度に保たれたサウナ治療室で 15 分ほど過ごし、出た後は 30 分ほど安静にして、水分を補給する。これを症状に応じて週 3～5 回ほど行う。この「和温療法」は、日本心臓病学会誌および米国心臓病学会誌に論文が掲載され、瞬く間に国内的にも国際的にも認知された。

1998 年から鹿児島大学大学院医歯学総合研究科循環器・呼吸器・代謝内科教授に就任、2012 年に退職。所属学会は日本循環器学会（理事、国際交流委員会委員長）、日本心臓病学会（理事、Journal of Cardiology 及び日本心臓病学会誌の編集長、2010 年から、理事長に就任。）、日本性差医学・医療学会理事、日本超音波医学会理事、日本心エコー図学会理事、日本心不全学会理事、日本心臓リハビリテーション学会理事、日本温泉気候物理医学会理事、日本循環制御医学会理事、アジア太平洋心エコードプラ会議会長など。

「和温療法」は、安全で副作用が無く、患者の気分を和ませる。しかも経済的で、重症患者にも安全で安心して使用できるやさしい治療法である。国内はもとより国際的にも注目されている。2012 年 9 月厚生労働省の専門家会議は、「和温療法」を慢性心不全治療の高度医療として認めることを決めた。未承認の機器を使うため費用はすべて患者負担だったが、診察や検査、入院費など通常の診療と共通する部分には保険が適用される。

連絡先：「ストレス」と「癒し」の研究会 第二解剖 仙波（内線）5155

*** 本講演会は和歌山県立医科大学医学振興会記念助成事業の助成を受けています。また今回の講演については、フクダ電子南近畿販売株式会社の協賛もを受けています。**